

2021年4月30日

## 2020年度 総合文化研究所研究助成報告書

研究の種類 ※該当する( )に ○を付ける	・共同研究(○)      ・個人研究( )	
研究代表者 (所属・職・氏名)	看護学部・助教・三里 久美子	
研究課題名	親への移行期における夫婦の体験、対処行動、相互作用の様相	
研究分担者氏名	所属・職	役割分担
岸田 泰子 ケニヨン 充子	看護学部・教授 看護学部・准教授	量的・質的データの分析 量的・質的データの分析
研究期間	2020年4月1日 ～ 2021年3月31日	

### 研究実績の概要(1)

今年度は以下の研究を行った。

#### I. 研究目的

本研究は、月齢3～4か月間の育児を伴う生活における夫婦のコミュニケーション態度、ストレス内容と夫婦の関係性の実態および出産後4か月間の夫婦が育児へ適応していくプロセスで生じていることを明らかにする目的で行った。

#### II. 研究方法

##### 1. 研究デザイン

ウェブ調査による実態調査および半構造化面接法による質的研究を組み合わせた混合研究である。

##### 2. 対象者

1) 質問紙調査：国内に居住し、調査機関に登録している月齢3～4か月児をもつ母親および父親、各104名である。

2) 面接調査：関東および九州地方に居住する出産後1～4か月にある母親4名である。

##### 3. データ収集方法

1) 「夫婦間コミュニケーション態度尺度」、「コーピング尺度」および「Marital Love Scale (MLS)」を使用し、外部の調査機関(株式会社マクロミル)へウェブ調査を委託し、データを収集した。

2) 産後1か月および3～4か月の時点で各1回、30～45分程度のインタビューガイドを用いてオンライン面接を行い、生活で体験したこと、感じたこと、対処行動や夫婦関係に関する変化などを中心に自由な語りを得た。面接内容は、対象者の許可を得てICレコーダーに録音した。

##### 4. 分析方法

## 研究実績の概要（2）

量的データは、統計解析用ソフト IBM SPSS Statistics24 を用いて、記述統計および  $t$  検定を行った。面接内容は逐語録におこし、複線経路・等至性モデル（TEM）を用いて質的帰納的に分析した。コーピング尺度のストレスに関する記述部分は、類似する内容を集めて分類し、ラベルを付した。

### 5. 倫理的配慮

研究の主旨、自由意思に基づく参加、辞退による不利益を受けないこと、途中辞退自由、匿名性の保証、プライバシーの保護およびデータは研究以外に使用しないことについて、ウェブ調査対象者へは調査機関より伝達し、面接調査対象者へは研究者が文書および口頭で説明し同意を得た。本研究は、研究倫理審査委員会の許可を得て行った。

### III. 結果・考察

#### 1) 月齢3～4か月間の育児を伴う生活における夫婦のコミュニケーション態度、ストレス要因と夫婦の関係性の実態

夫婦のコミュニケーション態度は、夫婦の共感的態度に着目し  $t$  検定を用いて比較した結果、夫が感じる妻から夫に対する共感的態度は、 $2.72 \pm 0.61$ 、妻が感じる妻から夫に対する共感的態度は、 $3.11 \pm 0.55$  で有意差があり ( $p < .001$ )、夫が感じる夫から妻に対する共感的態度は、 $3.00 \pm 0.65$ 、妻が感じる夫から妻に対する共感的態度は  $2.78 \pm 0.59$  で有意な差があった ( $p = .013$ )。夫婦間の共感的態度は、自己評価ほど相手に伝わっていないと言える。ストレス要因については、配偶者に対する不満を記載した妻は38名 (36.5%)、夫は9名 (8.7%) であった。育児に関連することを記載した妻は21名 (20.2%)、夫は10名 (9.6%) であり、そのうち5名の夫は児の泣きに対してストレスを感じていた。身体面に関して10名 (9.6%) の妻が不調を訴え、そのうち6名の妻が睡眠不足による不調を感じており、これらの現状を考慮した支援が必要である。MLSの結果は、妻の夫に対する愛情 ( $100.0 \pm 21.4$ ) が、夫の妻に対する愛情 ( $89.7 \pm 25.8$ ) より高く ( $p = .002$ )、有意な差があり、先行研究とは異なる結果であった。

#### 2) 出産後4か月間の夫婦が育児へ適応していくプロセスで生じていること

夫婦は新しい子どもの誕生（等至点1）後、母子の退院により新たな生活を開始する（必須通過点1）。まもなく妻の身体的疲労感（等至点2）が生じ、夫の身体・心理的支援（社会的ガイド1）が妻を支えるが、夫婦双方は困難感を抱き（必須通過点2）、両親による直接的支援（社会ガイド2）に支えられる。産後1か月を過ぎ、母子が里帰り先から自宅に戻り、あるいは支援に来ていた母親が帰ると夫婦だけでは難しいと感じ、必要時に家事・育児に関する家族の支援や公的支援を活用する（分岐点1）。また、妻が夫に対して自分の気持ちを伝える（分岐点2）ことで、夫が妻の気持ちに寄り添えるようになる（等至点3）。産後2か月頃に、妻は出産後の身体が楽になったことを実感する（等至点4）。産後2～3か月頃に、子どもの反応が増え、子どもの愛着行動の顕在化（社会的ガイド3）により、両親から子どもへの絆形成がさらに進み（必須通過点3）、夫婦ともに育児に慣れてくる（必須通過点4）が、妻は子どもに関する不安を抱くこともある。夫が育児に慣れると、妻は夫が子どもに対して肯定的に関わる姿を微笑ましく感じ（等至点5）、妻は家事・育児に関わる夫に感謝し、夫は仕事で不在中も子どもの面倒を見てくれている妻に感謝し、夫婦は互いに感謝しあう（等至点6）様相が明らかとなった。母子と家族を支援する看護者は、2つの分岐点において、夫婦が自ら家族形成を円滑に進められるように、困難やストレス内容を考慮し、支援を提供していく必要がある。今後は、対象者を増やして分析を進め、育児期の夫婦の径路の類型を把握し、育児期の家族支援に生かしていくこととする。

研究発表（印刷中も含む）雑誌および図書

**【論文】**

現在執筆準備中であり、母性衛生学会誌へ投稿を予定している。